

特別寄稿

大阪代協
ヒマラヤ漫遊記



夕日に映えるアンナプルナ

大阪代協の黒石光寿相談役、吹原成治事務局長、和歌山県代協の中村利雄会長、滋賀県代協の大谷和之顧問の4名は、昨年12月28日から今年1月6日まで、ネパールを訪問した。その主な目的は、黒石相談役の長年のライフワークでもある、同国の貧しい小学校への教育設備等の購入資金提供である。今回も日本代協近畿・阪神ブロックから寄せられた義援金等を活用し、多くの設備・備品が贈られた。ここでは、吹原事務局長の寄稿を紹介する。

黒石相談役ら4名が訪問
国境を越えた社会貢献活動

去る、2018年12月

28日、大阪代協から黒石光寿相談役、吹原、和歌山県代協から中村利雄会長、滋賀県代協から大谷和之顧問の4名が、日本代協近畿・阪神の西ブロックから寄せられた善意を携えて、関西国際空港を旅立った。行先は美しい人々が暮らす神秘の国ネパールだ。

大阪代協の黒石相談役は、西ブロックに所属する各代協から寄付を募り、ネパールの貧しい小学校に教育設備等の購入資金を提供する活動を以前から続けている。今回が15回目の渡航であり、他の3名が随行することとなった。今回集められた義援金はおよそ31万円である。

初日はランジットを含め約12時間かけてネパールの首都カトマンズに到着。翌朝、カトマンズから空路で西部の街ボカラに移動、

そこから車に乗って山道を約4時間走り(日本では通行止めになるような山道)、目的地のヒレという村にあるプメ・ベリックスクールにたどり着いた。児童90名ほどの小さな山村の小学校だ。日本から実に1日半をかけての到着だった。

現地に入るとまずウエルカム・スカーフと美しい花輪で迎えられた。そして感謝の気持ちを込めて我々の額に神聖なティカ(赤い粉)を塗ってくれた。校門からは両側に子供たちが一列に並び、「ナマステ」の挨拶と花びらを手渡してくれる。子どもたち一人ひとりと挨拶を交わし握手して歩いた。子供たちのキラキラと輝いた眼差しが心からの歓迎を伝えてくれた。

校長室で食事を用意した後、校庭で美しい衣装で着飾った子供たちの民族舞踊が披露され、遠来の客をもてなしてくれた。よほど懸命に練習したのであろう、どのダンスも見事な出来栄であり、旅の疲れはすっかり吹き飛んでしまった。



民族舞踊を披露する子供たち



日本代協のキャラクター「ふうた」の鞆を背負う子供

校長先生の挨拶の後、我々の代表である黒石相談役が立ち「私たちは日本という国から、皆さんの勉強のお手伝いに来て来た。国は離れていても心はつながっている。遠いところから皆さんが一生懸命勉強してこの国の発展に役立って立派な大人になることを期待している」

今回、我々が届けたものは、長机20脚、鞆(ふ)うたキャラクター入り、帽子、文房具を100セット、日本から持参したお菓子やお年玉、先生たちへのお土産としてダウソングケット10着などだ。早速鞆を背負い、はしゃ回る子供たちが印象的であった。彼らが将来大人になった時、日本のことを思い出し、互いの国の架け橋となってくれることを期待してやまない。その後さらに山を歩き、2019年1月6日、長い旅を終えて日本に戻ってきた。山での生活は日本の正月の対極にある厳しいものだ。だが、一生に何度も味わうことのできない、大変貴重な経験である。

(左から) 黒石相談役、大谷顧問、中村会長、吹原事務局長



贈呈した机の前で子供たちと記念撮影

1人ですべて段取りをしていたのだいた黒石相談役には感謝の言葉しかない。本当にありがとうございました。

ネパールの子供たちに

教育設備等の購入資金